大陸のコウノトリおよび その生息地

一般財団法人環境文化創造研究所　蘇 雲山

写真1／三江平原のもんぐ鎮の人工巣塔（蘇雲撮影）

はじめに

コウノトリはコウノトリ目コウノトリ科に属する大型水鳥で、日本では特別天然記念物、中国では国家1級重点保護動物に指定されています。国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストでは絶滅危惧IB類（EN）に分類され、成熟個体数は2,500羽未満と推定されており、珍しい鳥で、野生での絶滅の危険性が高い種として扱われています。

日本の野生コウノトリ個体群は1970年代に絶滅しましたが、2005年以降、兵庫県の豊岡において野生復帰を目指してコウノトリを放鳥し、15年が経過したら、野生個体は200羽の大台を超えています。しかし、日本の野生個体群は渡り鳥の習性をもたず、人工巣塔（あらかじめ人間が巣を設置した塔）で繁殖し、おもに人工採地である水田で採食しています。

これに対して、大陸のコウノトリは、中国とロシアの国境となるアムール川（黑龍江）とウスリー川（烏蘇里江）の両岸に広がる広大な湿地で繁殖し、そこから3,000km離れた中国南部長江流域の湖沼地帯で越冬します。繁殖地、中継地、越冬地のあいだを季節的に移動し、おもに天然湿地を採餌としています。

私は以前から大陸のコウノトリに対し高い関心をもっており、近年その代表的な繁殖地、中継地、越冬地を訪ねて情報を収集してきました。そこからわかった現況をご紹介します。

写真2／兵庫県豊岡市の野生復帰の巣塔の巣上で休憩中のコウノトリ（蘇雲撮影）

写真3／兵庫県豊岡市の天然巣塔（蘇雲撮影）

コウノトリの重要な繁殖地——三江平原湿地

三江平原とは、中露国境のアムール川とウスリー川および松花江という三大河川に囲まれる広大な平原を指し、面積は約10万km²に及び、アジアでは最大級の低湿地を有しています。しかし1950年代から、食糧増産のために湿地を干拓し農耕地を増やしたことで、20世紀末の湿地率は1950年代の80.1%から22.2%まで激減しました（劉興土ら、2001）。湿地の減少とともに、大面積の農耕地になれ変わり、大規模な国営農場が誕生し、コムギ、ダイズの一大産地に変貌しました。2000年以降、環境保護の意識が高まり、政府は法令を制定して開発を禁止しました。そして、未開発の原生湿地において自然保護区を設置し、野生動植物や湿地生態系を保護し始めました。

こうしてやや、三江平原湿地はラムサール条約の登録地として、コウノトリをはじめツル類、ガンカモ類など多くの水鳥にとって重要な繁殖地となっています。毎年3～4月になるとコウノトリは越冬地から戻り、営巣そして産卵、抱卵、育雛をおこない、5～6月に雛が巣立ち、10月下旬には長江流域の湖沼地帯に渡ります。コウノトリは三江平原に半年以上くらしていることになります。

コウノトリはツル類などとは異なり、大陸を渡って営巣・繁殖する純成性鳥（生まれた雛は巣にしば

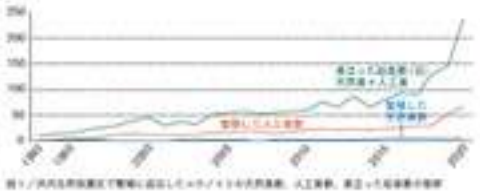

図1／三江平原湿地で繁殖に成功したコウノトリの天然巣塔、人工巣塔、農耕地の推移